

平和文化



2017. 12 No.196



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL (082) 241-5246 (代表) FAX (082) 542-7941 E-mail: p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成29年(2017年)12月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

被爆七十二周年平和記念式典 今年七月、国連では核兵器禁止条約が採択され核兵器廃絶に向かう明確な決意が示されました。

被爆七十二年目の八月六日(日)、広島市の平和記念公園で、市主催の平和記念式典(広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式)が行われ、被爆者や遺族など約五万人が参列して犠牲者の冥福と恒久平和を祈りました。

式典は午前八時に始まり、最初に松井一實広島市長と遺族代表二人が、この一年間に亡くなられたことが確認された五千五百三十人の氏名が記帳された三冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は三十七万八千七百二十五人、名簿総数は百十三冊となりました。

続いて広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された八時十五分に、遺族代表と子ども代表が平和の鐘をつきました。参列者全員が一分間の黙祷を捧げました。

この後、松井市長が平和宣言を行いました。市長は、核兵器の使用は人類として決して許されない行為であり、その保有は人類全体に危険を及ぼすための巨額な費用投入にすぎないと述べ、世界中の出来るだけ多くの人々に平和記念公園を訪れ、きこの雲の下で何が起ったかを知り、被爆者の核兵器廃絶への願いを受け止めた上で、

世界中に「共感」の輪を広げていただきたいと訴えました。



平和宣言を行う松井市長

また、日本政府には、今年七月に国連で採択された核兵器禁止条約の締結促進を目指して核保有国と非核保有国との橋渡しに本気で取り組むことや、平均年齢が八十一歳を超えた被爆者をはじめ放射線の影響により心身に苦しみを抱える多くの人々への支援策の一層の充実と、「黒い雨降雨地域」の拡大を強く求めました。

平和宣言の後、子ども代表の竹外直柔君と福永希美さんが、被爆により心身に深い傷を負いながらも、復興をあきらめず、必死で生きてきた人々に思いを馳せる「平和への誓い」を読み上げました。

この後「あいさつ」の中で、安倍晋三内閣総理大臣は、真に「核兵器のない世界」を実現するためには、核兵器国と非核兵器国双方の参画が必要であり、日本政府と

して、双方に働きかけを行うと述べ、世代や国境を越えて被爆体験を継承していく取組を推し進め核兵器不拡散条約(NPT)発効五十周年となる二〇二〇年のNPT運用検討会議が意義あるものとなるよう、積極的に貢献していく考えを示しました。

今回の式典では、アントニオ・グテレス国連事務総長のメッセージを、中満泉国連事務次長兼軍縮担当上級代表が、初めて日本語で代読しました。事務総長は核兵器禁止条約の採択へと繋がった、核兵器廃絶を目指す世界的な運動において、広島への平和へのメッセージと被爆者の方々の英雄的な努力は、核兵器の使用がもたらす壊滅的な影響を世界に強く印象付け、貴重な貢献をしてきたと高く評価しました。また、核兵器を保有する国々は、核軍縮に向けて具体的なステップを踏む特別な責任を有すると述べ、全ての国々に対し、それぞれのやり方により一層の努力を尽くすよう訴えました。

式典には三十六都道府県の遺族代表の他、核兵器国のアメリカ、イギリス、フランス、ロシアを含む八十か国と欧州連合(EU)の大使や代表が参列しました。

式典の様子(動画)、「平和宣言」、「平和への誓い」は、広島市ホームページ(<http://www.city.hiroshima.lg.jp/>)から閲覧できます。

(総務課)

目次

被爆72周年平和記念式典	1	平成27年度被爆者実態調査で提出された被爆体験記を暫定公開/国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」	10
「核兵器禁止条約」が採択されました/第9回平和と首長会議総会	2	旧日銀「収蔵資料展」展示更新/国際平和シンポジウム	11
長崎原爆犠牲者慰霊の会	3	青少年「平和と交流」支援事業/ひろしま子ども平和の集い	12
被爆体験記「平和への思いを胸に」(岸田弘子)	4	8Kスーパーハイビジョンで見る「原爆の絵」/ピースナイター2017/Sarayama Village—フロイド・シュモアが写した広島・江波・皿山	13
広島・長崎講座「開設大学支援/ヒロシマ・ピースフォーラム」	5	広島平和学習セミナー(いたま及び宇都宮)/新国際交流員の紹介(アンドリュー・デンブスター)/国際平和デー記念行事/「姉妹・友好都市の日」記念イベント(モントリオール、ボルゴグラド)	14
子ども平和キャンプ/沖縄県内3都市で原爆展	6	日本語ボランティア養成講座(上期)	15
「原爆の絵」が完成	7	JICAサロン「ベリーズってどんな国?」/「HIRO CLUB NEWS」英語版/「禎子さんの想いを歌う国 モンゴルで語り継がれるヒロシマの物語」(橋本優香)	16
被爆体験記朗読ボランティア新規加入/英語で伝えようヒロシマセミナー/被爆した地面を展示しています	8		
第21回展示検討会議/単行本未収録「はだしのゲン」扉絵展	9		

「核兵器禁止条約」が採択されました！

国際社会における核兵器の非人道性に対する認識の広がりや核軍縮の停滞などを背景に、本年七月七日、「核兵器禁止条約」が国連加盟国の六割を超える百二十二か国の賛成により採択され、多くの国が核兵器廃絶に向けて明確な決意を表明しました。十月には、条約採択への貢献などを理由に「核兵器廃絶国際キャンペーン」(ICAN)がノーベル平和賞を受賞するなど、世界的に条約に対する関心と期待が高まっています。



核兵器禁止条約の制定交渉会議の様子

待が高まっています。本号では、条約の主な特徴や今後の流れ等について紹介します。

一 条約の主な特徴

(一) 被爆者(ヒバクシャ)に言及(前文)

条約は、被爆者(ヒバクシャ)の苦しみと被害に触れ、人道の諸原則の推進のために核兵器廃絶に向けて被爆者などが行ってきた努力にも言及しています。

(二) 核兵器の開発、実験、使用、使用の威嚇などを禁止(第一条)

条約は、核兵器の開発、実験、製造、取得、保有、貯蔵、移譲、使用、使用の威嚇などの活動をいかなる場合にも禁止しています。

(三) 核保有国の加盟についても規定(第四条)

条約は、定められた期限までに国際機関の検証を受けて核兵器を廃棄する義務を果たすことを前提に、核保有国も条約に加盟できると規定しています。

(四) 条約の運用などについて話し合う会議を

開催(第八条)

条約は、その運用などについて話し合う締約国会議や再検討会議の開催について定めており、いずれの会議にも条約に加盟していない国やNGOなどをオブザーバーとして招請するとしています。

二 今後の流れ

本年九月二十日から各国による署名が開始されており、五十番目の国が批准した九十日後に条約が発効する見込みです。

また、条約の発効から一年以内に、最初の締約国会議が開かれる予定です。

三 課題など

今後、核保有国や核の傘の下にある国々を含む全ての国の締結をいかに促進するかが課題となっています。

平和首長会議では、「核兵器禁止条約」の早期締結を求める署名活動を行っており、今後も、加盟都市や市民社会と協働しながら、全ての国による条約締結が促進されるよう引き続き取組を進めていきます。

(平和連帯推進課)

第9回平和首長会議総会を開催

平和首長会議は、八月七日(月)から八月十日(木)までの日程で、四年に一度の総会を長崎市で開催しました。

第九回となる今回は、「核兵器のない世界」の実現を目指して「二〇二〇年に向けて、今、私たちができること」を基調テーマに、三十五か国百五十七の都市、政府、NGO等から三百十四人が参加し、二〇二〇年までの核兵器廃絶に向けた具体的な取組を中心に議論しました。

開会式

台風の影響により参加できなかった松井一貫広島市長(平和首長会議会長)に代わり、小溝泰義本財団理事長(平和首長会議事務総長)が、主催者を代表して会長挨拶を代読しました。松井市長は、七月に国連で採択された「核兵器禁止条約」に法的実効性を持たせるため、条約採択に参加しなかった核保有国とその傘の下の国々の早期締結に向けて、市民社会の声を結集していこうと呼び掛けました。その後、来賓代表として中村



基調講演でスピーチする中満泉国連事務次長兼軍縮担当上級代表

法道長崎県知事が挨拶されました。この他、総会に出席できなかった海外の加盟都市首長や核兵器禁止条約の交渉会議で議長を務めたコスタリカのホワイト大使からのビデオメッセージが寄せられました。

基調講演

中満泉国連事務次長兼軍縮担当上級代表が「二十一世紀軍縮の課題」と題して基調講演されました。中満氏は、今後の軍縮において、安全保障、人道的見地、開発と環境を考慮することが必須不可欠であると述べ、テロリスト等の不法かつ不安定な活動、違法な取引による兵器の流出、化学兵器などの違法な使用を終わらせるために、まず規範を築き上げ、国際的な連

携で対処すべきとの見解を示されました。

被爆体験証言

長崎で被爆された松尾幸子さんが自らの体験を振り返り、「あの体験は、誰にもさせたくない。」と語りました。

会議Ⅰ

この会議から合流した松井市長の進行により、役員都市の選任、二〇一七年から二〇二〇年までの行動計画などの議案について審議がなされ、原案どおり議決されました。

行動計画には、「核兵器のない世界の実現」というこれまで



総会の様子

の取組目標に、「安全で活力のある都市の実現」という新たな取組目標が加わりました。これは、平和文化の構築を図るとともに、テロ、難民、環境破壊など多様な課題に対する地域毎の主體的な取組を活性化していくためです。

会議Ⅱ

鈴木達治郎長崎大学核兵器廃絶研究センター長がモデレーターを務め、「都市の役割」をテーマに、ドイツ・ハノーバー市、フィリピン・モンテルパ市、フランス・マラコフ市とグ

リニール市、京都府綾部市から、各地域の活発な取組が発表され、平和・軍縮活動の未来の展望について意見交換が行われま

会議Ⅲ

会議の冒頭で、就任直後の河野太郎外務大臣が挨拶され、唯一の戦争被爆国として核保有国等と非核保有国との橋渡しをしなければならぬと述べられました。

その後、中村桂子長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授がモデレーターを務め、「若者の役割」をテーマに、長崎、広島等の学生と加盟都市首長等によ

るグループワークで核兵器禁止条約の動きや平和教育、平和活動などについて意見交換を行い、各都市で実現可能な平和活動計画を立案しました。

第七回国内加盟都市会議総会

会議①では、大阪府八尾市と兵庫県姫路市が取組事例を発表しました。

会議②では、未加盟自治体への加盟要請活動を展開するとともに、日本政府に対し、核兵器廃絶に向けた取組の推進について、力を尽くすよう要請文を提出することが議決されました。

会議③では、この会議の総括文書が採択され、田上富久長崎市長（平和首長会議副会長）の挨拶で閉会となりました。

また、来年度の第八回平和首長会議国内加盟都市会議総会が岐阜県高山市で開催されること

会議Ⅳ

朝長万左男核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員会委員長がモデレーターを務め、「NGO・市民団体・被爆者団体等の役割」をテーマに、ドイツ・ハノーバー市、韓国・済州特別自治道及び一般財団法人長崎原爆被災者協議会が、それぞれの取組を発表

し、意見交換しました。

会議Ⅴ

田上市長が議長を務め、各会議のモデレーターから内容が報告されました。

続いて、松井市長が今回の総会の総括として、「ナガサキアピール」及び「核兵器禁止条約の早期発効を求める特別決議」を読み上げ、会場からの拍手により議決された後、全ての議事は終了しました。

閉会式

英国・マンチェスター市のエディ・ニューマン市長（平和首長会議副会長）に続いて、田上市長が挨拶しました。

最後に、松井市長が、総会への参加、協力に対するお礼と、二三年後の二〇二〇年に広島で開催される次の総会までに、核兵器のない平和な世界へ確たる一歩を進められるよう、共に力を尽くしていきましょう」と決意を述べ、総会は閉会しました。

「ナガサキアピール」と「核兵器禁止条約の早期発効を求める特別決議」は、八月末に国連事務総長及び各国政府に送付されました。これらの文書及び議案書は、平和首長会議ホームページ (<http://www.mayorsforpeace.org/jp/>) で御覧頂くことができます。

（平和連帯推進課）

長崎原爆犠牲者 慰霊の会

本財団では、長崎に原爆が投下された八月九日に、同じ被爆地である広島から長崎の原爆犠牲者に哀悼の意を表し、平和への誓いを新たにすするため、「長崎原爆犠牲者慰霊の会」を開催しています。

平和記念資料館東館地下一階ホワイエで開催した今年の慰霊の会には、被爆者や国内外からの来館者など約百人が参加しました。

まず、城一博本財団常務理事の挨拶で開会し、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のテレビ中継を視聴しました。原爆投下時刻の午前十一時二分には、全員で一分間の黙とうを捧げました。

続いて、広島原爆被害者団体協議会の箕牧智之副理事長から挨拶をいただき、最後に、長崎の被爆者証言ビデオ（証言者・青木繁さん）を視聴して閉会しました。

（平和連帯推進課）



プロフィール

(きしだ ひろこ)

1939年(昭和14年)生まれ。
6歳の時、爆心地から北へ1.5kmの横川町の自宅のトイレで被爆。家族は、母、祖父、弟が自宅で被爆。兄は国民学校2年生で、登校し教室で被爆。父は徴兵され中国に従軍中だった。
2015年から被爆体験証言者として活動。

被爆体験記

平和への思いを胸に

本財団被爆体験証言者

岸田 弘子

「あとで必ず戻ってくるから」
一九四五年八月六日朝、広島は快晴でした。爆心地から一・五キロメートルの地点に建つ私の家は、木造二階建て。父親(三十六歳)は中国に出征し、兄(八歳)は国民学校に登校して留守でした。母親(三十四歳)と祖父(六十五歳)、弟(四歳)は家におり、私(六歳)は離れたトイレで、飛行機の音に気づき、窓から空を見上げていました。しかし、機体を発見できず顔を引っ込めた、その瞬間、大きな爆発音とともに目の前が真っ暗になりました。と同時に、トイレの土壁が崩れ落ち、気づいた時には、その土にすっぽり埋まって圧迫感を感じ、思わず「おかあちゃん、助けてー」と叫んだのです。その声を聞きつけた母は、私を引きあげてくれませんでした。家は、すさまじい爆風で、

あっという間に二階部分が吹き飛ばされましたが、奇跡的に母、祖父、弟は柱の間隙にいて助かりました。
しかし、いつまでも自宅にとどまっていられない、いつ爆弾が落ちてくるかわからない。足の不自由だった祖父は、「私のことはいいから、早く逃げなさい」と母をせき立てました。母は祖父に「あとで必ず戻ってくるから」といい残り、弟と私を連れて出たとたん、玄関は音を立てて崩れたのです。
私たちは避難訓練のとおり郊外へ逃げようとした。通りには、みんな夢遊病者のように歩く人の流れがありました。三十分程して、黒い雨が降り、道端のトマト畑に逃げ込みました。真っ赤に熟れたトマトに黒い汁が垂れた不気味な光景は忘れません。

我が子を背負う若いお母さん

夕方まで歩き続け、農家の庭で小休止。炊き出しの白米のおむすびは最高の喜びでした。
そこに、一人の若いお母さんが、すでに息絶えた赤ちゃんを背負い、「この子に食べさせてやって」とすがるように言うのですが、誰もが自分の命で一杯でした。その姿は、私の脳裏に強烈に刻まれました。
一昼夜歩き続け、母の友人宅に身を寄せることになりました。翌日から母は、祖父と兄を探しに出ました。自宅は全焼し、祖父は灰になり行方不明のままです。一週間後、兄が見つかりましたが、ひどいやけどで、長い間苦しみました。

原爆孤児の夫

私の夫は原爆投下のとき六歳で、両親と離れて疎開生活を送っていました。そのお陰で被爆を免れたのですが、市内にいた両親や弟は犠牲となり、一瞬にして原爆孤児となり、その後、親戚の家を転々としながら生きてきました。証券マンとして働いていましたが、少年時代にがまんしてきた寂しさや穴埋めするかのよう、生活は荒れていました。しかし、仏教の教えに触れて大きく変わり、社会人として仕事に勤しむと同時に、周囲の困っている人に手を差し伸べる生き方に喜びを見出したのです。しかしその夫は、三十歳で腎臓病を患い、五十歳で他界しました。

被爆体験証言者として

夫や母の人生、二人が私に向けてくれた愛情、そして何より平和を願って逝った原爆犠牲者の心を、一心に伝える時、耳を傾けてくれる修学旅行生、涙をぬぐって感想を述べてくれる外国人、聞く側と私がか心一つになつたように感じ、励みと勇気を頂く出会いです。
無念な思いを抱えながら命を絶たれた人の思いを忘れてはなりません。



「死んだ我が子を背負う若いお母さん」

製作者：津村果奈、岸田弘子

てきました。証券マンとして働いていましたが、少年時代にがまんしてきた寂しさや穴埋めするかのよう、生活は荒れていました。しかし、仏教の教えに触れて大きく変わり、社会人として仕事に勤しむと同時に、周囲の困っている人に手を差し伸べる生き方に喜びを見出したのです。しかしその夫は、三十歳で腎臓病を患い、五十歳で他界しました。

ヒロシマは祈りの都市です。命の尊さと平和の大切さを実感するところです。

核兵器を地球から無くすことを訴え続けていきたい。

平和な世界の実現を祈って!!

「広島・長崎講座」開設大学への支援

広島市と長崎市は、被爆の実相や被爆者のメッセージを若い世代に伝えるため、学術的に整理・体系化し、学問として普遍性を持たせた「広島・長崎講座」の開設・普及に取り組んでいます。

本財団は、平成二十九年四月から六月の間、次の米国の三大学が広島で実施した平和学習に際し、プログラムの実施支援等を行いました。

カールトン大学

四月十九日(水)、学生十五人と教員一人が、同大学二回目の平和学習を行いました。平和記念公園や平和記念資料館、原爆死没者追悼平和祈念館の見学、被爆体験証言の聴講を通し、被



被爆体験証言者の小倉桂子さんと一緒に

爆の実相や平和について考える有意義な一日となりました。

インディアナポリス大学

五月十一日(木)から五月



鶴田マリ名誉学院長と一緒に

十三日(土)まで、学生十人と教員三人が、同大学六回目の平和学習を実施しました。平和記念資料館見学、国連訓練調査研究所(ユニタール)広島事務所訪問、被爆体験証言の聴講、鶴田マリ広島YMCA外語学院名誉院長の講義、原爆死没者追悼平和祈念館の見学などを通して、被爆の実相について学びました。

セントラルコネティカット州立大学

六月三日(土)、学生十一人と教員二人が、同大学十一回目の平和学習を行いました。平和記念公園や平和記念資料館、原爆



平和記念資料館の前で

死没者追悼平和祈念館の見学、被爆体験証言の聴講などを通して、被爆の実相を学びました。

また、引率の友田静子教授のお母様の遺影が祈念館に登録されており、一行はその見学を通して、被爆とその記憶の継承についてより身近に感じたようでした。

その他、広島市立大学及び広島経済大学の学生と、広島市の夏の訪れを告げる祭「とうかさ」を楽しみ、交流を図る良い機会となりました。

(平和連帯推進課)

ヒロシマ・ピースフォーラム

本財団では、市民が「平和の原点」としての「ヒロシマ」を見つめ直し、原爆や平和について考え、行動していく機会を提供する「ヒロシマ・ピースフォーラム」を、広島市と共催で開催しています。今年度も広島市立大学の講座「広島からの平和学」と連携して、五月から七月までの間に全六回開催し、同大学の



講義の様子

学生を含む十代から七十代以上の七十人が受講しました。

フォーラムでは、被爆体験証言の聴講や、広島港周辺の戦争に関する史跡巡りといった講義を通して、原爆や平和について考えるとともに、グループ討議により、活発な意見交換を行いました。

受講者のアンケートでは、「年代の異なる人々とのグループ討議はとても刺激的だった」、「原爆被害や平和に関して様々な話を聞いて価値観が広がった」等の感想が寄せられました。

(平和連帯推進課)

子ども平和キャンプ

楽しみながら平和を考える

本財団では、六月三日から一泊二日の日程で、小・中学生向けの平和キャンプを、広島市三滝少年自然の家と広島市似島臨海少年自然の家との共催で実施しました。

通算二十四回目となる今年のキャンプには、四年生以上の小学生二十三人、中学生五人、十八歳以上のボランティア六人の計三十四人が参加しました。

一日目は、被爆体験伝承講話を聴いたり、被爆後の復旧の様子を紹介したアニメを鑑賞するなどして、被爆の実相について学習し、続いて、原爆ドーム前から広島港まで被爆電車に乗り、車内で沿線の被爆建物などについて説明を受けた後、似島へ移動しました。

似島では、かつて戦争と原爆に翻弄された似島の歴史を詳しく



「焼け跡からやっと見つけた孫娘を連れ帰るお婆さん—その女の子の膝から下は骨になっていた—」
製作者：野村かなめ(基町高等学校3年生)、浅野温生



「くちびるの潰れた友達」
製作者：奥野天葵(基町高等学校2年生)、浅野温生



「炎から逃れ水を求めて雁木に集まってきた人々」
製作者：松田優奈(基町高等学校3年生)、大田金次(本財団被爆体験証言者)



「御幸橋より 波に漂う屍」
製作者：石田菜々子(基町高等学校3年生)、河野千由美(本財団被爆体験証言者)



似島の歴史を学んでいる様子

く学び、遺構を見学しました。夜には、キャンプファイヤーや星空観察を行いました。二日目は、似島とバウムクーヘンの関わりを学び、実際に皆で協力してバウムクーヘンを作り、おいしく食べました。最後に、似島の慰霊碑を参拝し、班ごとに二日間の学習の振り返りを行いました。振り返りの中では「核兵器はなくなっほしい」、「戦争はしないほうがいい」といった声が出

沖縄県内三都市で原爆展を開催しました

るなど、次世代を担う小・中学生が、楽しく時間を過ごしながら、平和について考える有意義な機会となりました。

(平和記念資料館 啓発課)

平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた国内世論を醸成するため、平成八年度から国内各地の都市で原爆展を開催しています。本年度は初めて沖縄県内で開催し、糸満市、沖縄市、石垣市の三都市合わせて、二万五千人以上の来場者がありました。各展示会場では、被爆資料のほか、被爆の実相や核兵器の現状を伝える写真パネル、市民が描いた原爆の絵の展示等を行いました。また、糸満市では瀬越



展示会来場者の様子(石垣市)

来場者からは、「原爆のことは遠い感じが、どうしてもする。このような企画展があると、より身近に感じ、現在世界の国々の非核化について議論していることを、より関心を持って見て

いけないといけないと思うようになった」、「戦争を起さないうことを世界や後世に伝えていく」などの感想が寄せられました。

実施の概要

【糸満市】

期間 七月一日(土)～八月十二日(土)(四十三日間)

場所 沖縄県平和祈念資料館企画展示室

来場者数 一万千五百二十七人

【沖縄市】

期間 八月十六日(水)～八月二十七日(日)(十二日間)

場所 沖縄市役所市民ホール

来場者数 約一万二千人

【石垣市】

期間 九月三日(日)～九月十五日(金)(十三日間)

場所 石垣市民会館展示ホール

来場者数 千七百九十二人

(平和記念資料館 啓発課)

「原爆の絵」が完成

「高校生たちが被爆体験を絵に描く」

本財団は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、平成十九年度から、本財団被爆体験証言者と同校生徒が共同し、証言者の記憶に残る被爆時の光景を描き、当時の状況を伝える「原爆の絵」の制作に取り組んでいます。

八人の証言者と十八人の生徒が平成二十八年度から制作を進



「川で亡くなった人々を收容する兵士」

製作者：加藤詩温（基町高等学校2年生）、浅野温生



「防火用水の中で立ったまま焼かれた被爆者たち」

製作者：三坂日奈子（基町高等学校2年生）、浅野温生（本財団被爆体験証言者）



「遺体收容所」になった二中のグラウンドに並んでいた賞巻き状態の遺体」

製作者：川崎友貴（基町高等学校3年生）、浅野温生



「焼けた電車内、逃げる間もなく死んでいった二人の亡骸」

製作者：桐林勲（基町高等学校2年生）、浅野温生



「家族を火葬する人たち」

製作者：亀高菜那（基町高等学校2年生）、浅野温生



「払っても寄ってくるハエ、異様な臭いに群がるウジ」

製作者：今村遥香（基町高等学校3年生）、笠岡貞江（本財団被爆体験証言者）



「潮の引いた河原の惨状」

製作者：黒川奈夏（基町高等学校3年生）、大田金次



「日赤病院前の無傷の死体」

製作者：前田葉月（基町高等学校2年生）、浅野温生



「広島文理大学グラウンドの惨状」

製作者：和田はるな（基町高等学校2年生）、新宅勝文



「爆風で亡くなった女性」

製作者：河崎海斗（基町高等学校2年生）、新宅勝文（本財団被爆体験証言者）



『友達を助けてくれ』『火が回って来たぞ、逃げろ!』

製作者：宮本陽菜（基町高等学校2年生）、兒玉光雄（本財団被爆体験証言者）



「小学校の体育館でうじ虫を取ってもらっている」

製作者：島田菜々花（基町高等学校2年生）、松本都美子（本財団被爆体験証言者）



「力尽きた人々」

製作者：杉江湧愛（基町高等学校3年生）、朴南珠（本財団被爆体験証言者）



「市内電車の中で吊革を持ったまま焼けて、骨になった人」

製作者：岡田萌々（基町高等学校2年生）、新宅勝文

め、このたび、十八点の絵画が完成しました。

七月四日（火）に、基町高等学校展示ギャラリーで行われた完成披露会には、七人の証言者と、絵を制作した生徒を始めとする創造表現コース生徒のほ

か、本財団及び基町高等学校関係者が出席しました。

川に漂う無数の死体を描いた生徒は、「最初は凄惨な世界を絵に表現できるか不安だった。水の色を忠実に再現するため何度も描き直した。制作を通して

自分の想像以上の現実があったことを学んだ。今後も平和のためにできることをしていきたい」と話してくれました。

完成した「原爆の絵」は、被爆体験をより深く理解してもらうため、証言者による被爆体験

講話で活用するほか、絵の貸出や、画像データの提供なども行い、原爆被害の実相を後世に継承するために役立てています。

（平和記念資料館 啓発課）

被爆体験記朗読 ボランティアの 新規加入

原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆体験記や原爆詩を読み語り、被爆者の記憶や思いを次の世代へ継承することを目的に、「被爆体験記朗読会」を開催しています。

朗読会は、体験記や原爆詩を朗読する「被爆体験記朗読ボランティア」の協力で開催しており、この朗読ボランティアには本年三月末現在で七十七人の方に登録していただいています。

平成十七年春から開始したこの朗読会は、今年で十二年が経



被爆体験記朗読会の様子

過し、各方面から高い評価を得て、開催申込み数が年々増加しており、本年五月、被爆体験記朗読ボランティアを追加募集しました。

多数の応募者から面接及び朗読実技審査会を経て、七月、アウンサーや劇団員の経験者等十四人の方を選考して追加登録し、また、地元テレビ局の推薦で二人の現役アウンサーにも登録していただき、現在、総勢九十三人となっています。

新規加入の朗読ボランティアには原爆被害の実態等を学ぶ研修会や朗読練習会に参加していただき、十月から朗読者として活動していただいています。

被爆体験記朗読会は、修学旅行や平和学習で平和記念公園を訪れる小・中学生、高校生を対象に開催するだけでなく、広島市内及び近郊の学校や公民館などに朗読ボランティアを派遣しています。また、海外からの来館者を対象に英語朗読会も開催し、毎月、だれでも自由に参加できる定期朗読会も開催していますので、多数の皆様のご参加をお待ちしています。

【お問い合わせ】

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館まで

☎(082) 54336271

英語で伝えよう ヒロシマセミナー ナーの実施

平和記念資料館では、原爆被害の実相を英語で正しく伝えるための知識と表現を学ぶ「英語で伝えようヒロシマセミナー」を平成十八年度から実施しています。

今年度は七月九日(日)にベーシック編、七月十六日(日)にアドバンス編をそれぞれ実施し、十代から七十代まで幅広い世代の三百五十七人が参加しました。

ベーシック編では、資料館職員が英語で原爆被害の概要について説明した後、米国出身のク



ベーシック編の様子

被爆した地面を 展示しています

丹下健三氏設計の広島平和

記念資料館本館は、戦後建築として初めて国の重要文化財に指定されています。この建物を地震から守るため、現在、耐震改修等工事を進めています。工事に先立ち、埋蔵文化財保護のため、平成二十七年十一月から平成二十九年三月にかけて(公財)広島市文化財団によって本館下の発掘調査が行われました。この過程で、広島市は被爆面の一部を



展示ケース内の黒い塊が被爆面です。

切りとり、処理をして保存・活用することになりました。

切りとった被爆面は平成三十年三月(予定)まで平和記念資料館東館一階無料スペースで展示しています。(平和記念資料館 学芸課)

レイグ・ネヴィットさんが、平和の象徴や平和記念公園の碑などについて英語で説明するグループワークを行いました。グループワークでは、老若男女を問わず、参加者が活発に意見交換を行い、積極的に発表する姿が見られました。参加者からは、「簡単な単語を用いての説明方法がよく分かった」「いろいろな意見が聞けてよかった」「今後、熱心に取り組もうと思った」などの声が寄せられました。

アドバンス編では、まずネヴィットさんが英語で原爆被害の概要について解説しました。その後、被爆者の梶本淑子さんが自身の被爆体験を日本語で話し、ひろしま通訳・ガイド協会の福井まりさんが、英語で逐次通訳を行いました。参加者からは、「原爆の悲惨さと英語での伝え方がよく分かった」「日英両方で証言が聞けてよかった」などの声がありました。

資料館では、来年一月に二回

目の同セミナーを開催します。
(平和記念資料館 啓発課)

第二十一回 展示検討会議 の開催

広島平和記念資料館では、本年四月二十六日に東館がリニューアルオープンしました。現在は、本館展示の更新を進めています。東館と同様に、原爆被害、核や平和問題などの有識者で構成する展示検討会議の委員から展示構成、展示手法、展示資料の収集・選定などについて指導・助言を受けながら、展示内容の検討を行っています。七月二十六日に第二十一回展示検討会議を開催し、本館展示について検討しました。本館では、学生服や弁当箱などの遺品や、火傷を負った人々の写真、被爆者が描いた原爆の絵などを展示し、人間（被爆者）の視点から原爆の悲惨さを伝えます。展示は【八月六日のヒロシマ】、【被爆者】の二つのゾーンで構成し、さらに【八月六日のヒロシマ】は八月六日の惨状と放射線による被害、【被爆者】は〈魂の叫び〉と〈生きる〉とい

資料展

「単行本未収録 『はだしのゲン』 扉絵展」

平和記念資料館では、漫画「はだしのゲン」(中沢啓治氏)の少年誌連載の扉絵とその原画の複製を展示する資料展を平成二十九年七月二十日から十二月末頃(予定)まで当館東館地下階で開催しています。

「はだしのゲン」の前半部分は「週刊少年ジャンプ」に昭和

うテーマに分かれています。今回の会議では、それぞれの展示エリアに次のような展示イメージを示し、意見を交わしました。

【八月六日のヒロシマ】

東館から渡り廊下を渡り、突き当りの本館の最初の壁面に、人の被害を伝える画像を展示。その後の通路部分には、立ち上るきのこ雲、八月六日に撮影された火傷と負傷にあえぐ人々の写真が続きます。

その通路を抜けた先の展示室の中央に大型の展示ケースを配置し、建物疎開作業に動員され、

四十八年六月から昭和四十九年九月まで五十九号にわたって連載されました。その一話ごとに内容を凝縮した扉絵(連載用の表紙)が描かれていますが、昭和五十年から刊行された単行本には収録されていません。このうち四十五号分の原画が、平成二十三年に広島市に寄贈された中沢資料に含まれていました。

今回の資料展では、この扉絵の精緻な複製原画を初公開しました。会場では、平成二十四年に亡くなられた中沢

氏の証言ビデオも放映しています。

来場者からは、「『はだしのゲン』がジャンプに連載されていたことをはじめて知りました」「自分はこの頃のジャンプを読んでいたので懐かしいです」「ゲンは世代を超えて、読み継がれていく漫画だと思えます」「原爆の被害が二度とあってはならないという中沢さんの強い思いを感じました」等の感想が寄せられました。

(平和記念資料館 学芸課)



「週刊少年ジャンプ」(一九七三年六月四日発行、第二十五号)連載開始時の扉絵。単行本未収録のため、目にする機会が極めて少ない画像です。

し、人への被害を伝えます。

【被爆者】

〈魂の叫び〉のコーナーでは、一点一点の資料と向き合い、亡くなった一人一人の命と家族の思いを感じ取ってもらうために、展示室中央に小型の展示ケースを複数台配置し、資料は一点ずつ展示することを考えています。また、遺影や家族写真、亡くなった人の言葉なども添えて、資料から人の姿を想像できる展示手法も考えています。「市民が描いた原爆の絵」は、現物を展示するコーナーを設け、定

期的に入れ替えることを検討しています。

今回の会議では、写真や原爆の絵を選ぶ際には実証性を重視することや、被爆者の気持ちが入められ描かれた原爆の絵は、展示場所や展示手法を十分に検討することなどの意見がありました。こうした意見を踏まえて展示案を見直し、展示検討会議に諮りながら展示内容を固めていきます。

(平和記念資料館 学芸課)

平成二十七年原子爆弾被爆者実態調査に伴い提出された被爆体験記「被爆について思うこと」の暫定公開について

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、厚生労働省が実施した平成二十七年原子爆弾被爆者実態調査に伴い提出された被爆体験記を受領し、整理していましたが、このたび被爆体験記集として仮製本し、当館及び国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で七月二十八日から暫定的に公開しています。



仮製本した被爆体験記集全61巻

このたび仮製本した被爆体験記集は全六十一巻（外国語四巻、索引一巻を含む）になりました。被爆者の高齢化が進む中、これだけの規模で被爆体験記が収集できる機会は、今後は少な

くなっていくと思われま

原子爆弾被爆者実態調査に併せた被爆体験記の収集は、これまで、平成七年度、平成十七年度にも行われ、それぞれ、八万二千二百五件、一万千七百七十八件がデータベース化を終え、当館の体験記閲覧室及び長崎の祈念館で公開されています。

今回が三回目の収集となる平成二十七年分被爆体験記についても、今後、職員が一件一件読み込み、執筆者の被爆当時の職種や所属、被爆区分、被爆場所、登場する被爆者のお名前、登場する地名や施設名等をデータベースに登録し、様々な項目で検索できるようにしていきます。全件のデータベース化が完了した時点で、改めて製本し直し、広島・長崎の両祈念館で正式に公開する予定です。

被爆体験記には、被爆の惨状、亡くなった家族や友人への思い、そして核兵器廃絶と世界平和への願いが綴られています。思い出したくない記憶、思い出すのもつらい記憶を、氣力を振り絞って書いてくださった方も多くおられます。被爆体験記を読み、戦争の恐ろしさ、核兵器の悲惨さを知り、平和の大切さを一人でも多くの方に受け継い

でいただければと思います。

被爆体験記を通じて、被爆者の「こころ」と「ことば」にふれてください。

なお、貸出や複写サービスは行っておりませんので、ご了承ください。

【お問い合わせ】
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館まで
☎(082) 543・6271

国内ジャーナリスト研修 ヒロシマ講座

広島市では、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けた世論の醸成を図るため、今年も国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」を実施しました。

平成十四年度から開始した当講座は、国内の新聞社の若手ジャーナリストを対象に、被爆の実相や被爆地広島島の役割、核兵器を巡る世界情勢等について総合的・体系的に学び、その成果を報道や論説活動等を通じて広く国内外に発信していただくことを目的としています。

十六回目の今年の講座は、地方紙の記者十人が参加し、七月二十八日(金)から八月七日(月)までの十一日間、被爆者の証言の聴講や原爆被害に関する講義

などを受けるとともに、核兵器廃絶に向けて取り組む若者や平和記念式典の取材などを行っていました。

参加者からは、「研修での体験を社で共有し、新聞社として何ができるか考えたい」、「被爆の実相を継承していく広島市の取組は地元でも見習うべきだと思った」等の感想が寄せられました。

参加者は、この研修を通じて学んだ被爆者の体験や平和への思いを、八月六日の広島の様子とともに各紙に掲載し、ヒロシマの心を広く伝えました。

【お問い合わせ】
広島市市民局国際平和推進部平和推進課まで
☎(082) 242・7831

原子爆弾被爆者実態調査は、被爆者の生活、健康等の現状を把握すること等を目的に、十年ごとに厚生労働省が各都道府県及び広島市・長崎市に委託して実施するもので、平成二十七年度は、十一月一日を調査基準日として、国内外五万六千二百二十九人を対象に行われました。国内調査は抽出率三〇％で回収率は七三・二％、国外調査は全被爆者対象で回収率は八一・〇％でした。

調査票のほかに、被爆者の方には、「被爆について思うこと」として、被爆体験を通じて後世に伝えたいことなど、七十年間を振り返っての思いを自由に記載していただき、提出された一万千三百七十五件の用紙は、被爆体験記として、広島・長崎の両祈念館で保存・公開されます。

国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」は、被爆者の証言を聴き、原爆被害の現状を学び、平和の大切さを伝えることを目的として実施されています。

今年度は、七月二十八日から八月七日までの十一日間、被爆者の証言の聴講や原爆被害に関する講義などを受けるとともに、核兵器廃絶に向けて取り組む若者や平和記念式典の取材などを行いました。



研修を受講する参加者

旧日銀「収蔵資料展」の展示を更新

本年七月二十八日（金）、中区袋町の旧日本銀行広島支店地下一階で開催中の「収蔵資料展」の展示を更新しました。更新後の展示は、会期は来年七月まで、入場は無料です。

三つの展示室（OCR室・第一金庫室・第二金庫室）のうち、OCR室では、「あなたが今いるこの通りでー鯉城通りの惨状ー」と題し、展示会場である旧日本銀行広島支店が面する電車通り（鯉城通り）沿いの惨状が描かれた三十八点の「原爆の絵」を展示しています。これらの絵には、平和大通りから紙屋町交差点までの鯉城通りの惨状が描かれており、今では近代的な建物が建ち並ぶこの周辺に、被爆直後、どれほど悲惨な光景が広がっていたかを知ることができます。この展示では、絵に描かれたまさにその場所での当時の惨状を想像できるような、来場者が持ち帰ることができる「鯉城通りフィールドワークマップ」(日・英)を会場に配布しています。会場から出た後も街を歩きながら学べる資料として、多くの来場者にご利用いた

だいています。

また、第二金庫室では、「二〇一六年度海外資料調査速報展」記録された原爆投下・廃墟の広島」と題し、昨年十一月〜十二月に資料館職員が米国で調査し、新たに入手した写真を初めて展示しています。展示している三十二点の写真には、新たに発見されたエノラ・ゲイから撮影されたきこの雲の写真や焼け野原となった市街地の空撮写真、広島を訪れた米兵が個人的に撮影した写真が含まれています。これらの写真は、原爆の被害をより詳細に知ることのできる貴重な資料です。



鯉城通りフィールドワークマップ(日・英)



ながれかわ
流川教会前(撮影:米軍/所蔵:米海軍歴史遺産部、寄贈:トーマス・ポロック氏)

なお、第一金庫室では、昨年度から引き続き「熱と炎のつめ跡」と題し、被爆資料を展示しています。三つの展示室を合わせてご覧いただくことで、被爆の実相を多角的に学ぶことができます。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

(平和記念資料館 学芸課)

国際平和シンポジウムの開催

七月二十九日（土）、本財団と広島市、朝日新聞社の共催により、「核兵器廃絶への道〜この世界の分断を越えて〜」をテーマに、国際平和シンポジウ

ムを広島国際会議場で開催しました。

最初に、広島市立千田小学校合唱隊が、校内の枯れた被爆樹木「カイツカイブキ」を再生した笛「パンフルート」の合奏と合唱を披露しました。

続いて、戦時下の広島を舞台に困難の中にあっても普通の暮らしを大切に生きる女性を描き、芸術選奨など多くの賞を受賞した映画「この世界の片隅に」の片淵須直監督と、広島映画館経営者の蔵本順子氏の特別対談を行いました。片淵監督は、蔵本氏が経営する映画館での別の作品の舞台挨拶のために広島を初訪問したことが、この映画製作のきっかけとなったとの逸話を披露しました。

基調講演では、オバマ政権下で核・軍備管理・不拡散政策担当特別補佐官を務めたジョン・ウォルフスタール氏が登壇し、核のリスクを理解し「核兵器なき世界」の実現を追求したオバマ政権に対し、トランプ大統領は核の危険性を十分に認識せず、米国とロシア、北朝鮮、イランとの関係で核兵器使用のリスクを高めていると述べました。また、ホロコーストを生き延びた父をもつウォルフスタール氏は、広島・長崎の人々と平

和を追求する歴史的義務を共有していると言及しました。

パネルディスカッションでは、ウォルフスタール氏のほか、小溝泰義本財団理事長、米国ブラウン大学のニーナ・タネンウォルド国際関係プログラム長、ヒバクシャ国際署名キヤンペーンリーダーの林田光弘氏が、本年七月に採択された核兵器禁止条約や北朝鮮の核問題など、国際情勢について議論しました。小溝理事長は、核抑止の考え方を考え、核兵器廃絶を実現するには、立場を超えた対話が不可欠であり、核抑止の背景にある相互不信を相互理解や相互協力に変えていくために粘り強い努力が必要であると訴えました。



パネルディスカッションでの小溝理事長

(平和連帯推進課)

青少年「平和と交流」支援事業

核兵器廃絶と世界恒久平和の実現のための人材育成と、平和首長会議の加盟都市間のネットワーク強化を目的とする、青少年「平和と交流」支援事業を実施しました。

この事業は、国内外の平和首長会議加盟都市の青少年を対象に、被爆者の体験や平和への思いなどを伝え、若者同士の交流を深めるため、広島市等が実施する事業への参加を支援するものです。

別表のとおり、今夏「HIROSHIMA and PEACE」「青少年国際平和未来会議ヒロシマ」「ひろ



参加者による意見交換 (HIROSHIMA and PEACE)

対象事業 (広島市等の所管)	広島市等が実施する事業の概要	平和首長会議 独自プログラム を含めた全体日程	平和首長会議 独自プログラム を含めた実施場所	支援人数 (実績)	参加者の 派遣元加盟自治体
HIROSHIMA and PEACE (広島市立大学国際学部)	国内外の学生等が「ヒロシマと平和」を英語で学ぶ夏期集中講座	7/31~8/9 (10日間)	広島市立大学 平和記念資料館等	9人 (学生・社会人)	サントス市 (ブラジル)、ジャンティイ市 (フランス)、ハノーバー市 (ドイツ)、ボルゴグラード市 (ロシア)、マンチェスター市 (英国)、モントリオール市 (カナダ)、ユジノサハリンスク市 (ロシア)、秋田市、上越市
青少年国際平和未来会議 ヒロシマ (広島市教育委員会)	広島市及び姉妹・友好都市等の青少年による平和貢献をテーマにした交流活動	8/4~8/14 (11日間)	広島市国際青年会館等	6人 (学生)	イーベル市 (ベルギー)、グラノラズ市 (スペイン)、サントス市 (ブラジル)、ハノーバー市 (ドイツ)、ボルゴグラード市 (ロシア)、マンチェスター市 (英国)
ひろしま子ども平和の集い (・(公財)広島平和文化センター ・広島市 (市民局、教育委員会))	子どもたちによる平和メッセージの発信	8/5~8/7 (3日間)	国際会議場 平和記念資料館等	3人 (高校生・引率者)	いわき市
ヒロシマ平和セミナー (広島市立大学広島平和研究所)	公務員や大学院生等を対象にした平和・国際関係に係る集中講義	8/24~8/28 (5日間)	広島市立大学サテライトキャンパス 平和記念資料館等	2人 (公務員)	相模原市、松本市

しま子ども平和の集い」「ヒロシマ平和セミナー」の四事業を
対象に支援を行いました。
また、各プログラムにあわせ

て、平和首長会議の概要説明や意見交換会等の平和首長会議の独自プログラムを実施しました。
(平和連帯推進課)

「平成二十九年度ひろしま子ども平和の集い」の開催

八月六日(日)、広島市、広島市教育委員会との共催により、若い世代の平和意識の高揚と主体的な取組の促進を図る「平成二十九年度ひろしま子ども平和の集い」を広島国際会議場で開催しました。

最初に、広島市市民局長が挨拶を行い、広島県内外から参加した十団体の児童・生徒に、平和への熱いメッセージを広島地から世界に向けて発信してほしいと呼び掛けました。

その後、児童・生徒は平和への思いをメッセージ発表や合唱、群読や作文朗読など、様々な表現方



作文を朗読する沖縄県の石垣市平和大使

法で発信しました。児童・生徒の多くは当日朝、平和記念式典に参列しており、全ての発表において平和な世界の実現に向けた子どもたちの熱意と高い意識が感じられました。最後に、発表した各団体へ、広島市教育長から「アオギリ賞」、「キョウチクトウ賞」、「折り鶴賞」として表彰状と記念の楯が贈呈されました。会場は、開会から閉会まで多くの来場者で賑わいました。
(平和連帯推進課)

特別展示 「8Kスーパーハイ ビジョンで見る原 爆の絵」を開催

平和記念資料館では、「市民が描いた原爆の絵」の経年劣化が課題の一つになっていることから、この度NHKと共同で「原爆の絵」約四千二百点について超高精細画像によるデジタルアーカイブ化を行いました。これにより、体験者の目線で描かれた当時の光景を、展示等により鮮明に再現することが可能となりました。この超高精細画像を使用した番組の上映と、地図上にサムネイル表示された絵を選択し8Kの超高精細画像で絵の細部まで鑑賞することができると特別展示を、八月一日から十六日までNHKと共同で開催しました。

来場者からは、「当時の状況が胸に痛いほど伝わった」「被爆者が渾身の思いで描いた絵を、最新技術で後世まで伝えていくことは素晴らしいこと。」等の感想が寄せられました。

(平和記念資料館 学芸課)

「ピースナイター 二〇一七」の開催

八月二日(水)、本財団と生協ひろしま等との共催により、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けたメッセージを広島東洋カープ応援の場を活用して発信する「ピースナイター二〇一七」をマツダスタジアムで開催しました。

昨年に続き「継承」をテーマに、

- ① 大型ビジョンで松井市長や湯崎県知事等の平和を願うメッセージを放映したほか、二〇〇八年に始まったピースナイター十周年の歩みを紹介しました。
- ② 廿日市市生まれで被爆二世の歌手高橋真梨子さんが始球式を行いました。
- ③ 広島東洋カープの監督、選手等がユニフォームにピースワッペンを着けてプレーしました。
- ④ 五回裏終了時に、入場者が配付されたピースポスターを掲げて、

球場全体が平和首長会議のイメージカラーである緑色に染まる中、原爆ドームと同じ高さの地上二十五メートルに復興の象徴であるカープをイメージした赤色の線「ピースライン25」を作り、平和への願いをアピールしました。また、グラウンドでは、地元高校生等による「ピースパフォーマンズ」が行われました。

約三万人の方々に参加いただき、多くの方が核兵器廃絶及び世界恒久平和について考える日となりました。

(平和連帯推進課)



緑色と赤色のピースポスターを用いて原爆ドームと同じ高さ「ピースライン25」を作る観客

シュモーターハウス企画展 「Sarayama Village フロイド・シュモーター 写した広島・江 波・皿山」を開催

中区江波二本松一丁目にある平和記念資料館附属展示施設シュモーターハウスで、フロイド・シュモーター氏が撮影した広島や江波の貴重なカラー写真を紹介する企画展を、八月二日から十一月五日まで開催しました。

米国の森林学者で平和運動家のフロイド・シュモーター氏は、広島・長崎への原爆投下心に痛み、住まいを失った広島の人々のために家を建てる活動を進めました。その際、シュモーター氏は自らのカメラで、広島風景や人々、「広島の家」建設の様子をカラー写真等で撮影してまいりました。今年七月、これらの貴重な写真百六十三枚が米国のシュモーター氏遺族から市民団体シュモーターに学ぶ会へ寄贈され、平和記念資料館へ寄託されました。

今回の企画展では、これらの写真を使い、中区江波皿山のふもとに建てられた「広島の家」の写真を中心に紹介しました。

来場者からは、「シュモーターさんの優しさ、強さに心が揺さぶられた」「シュモーターさんの想いをこの先も受け継いでいきたい。」等の感想が寄せられました。

自ら資金を集め、人種を超えた仲間と共に、住まいを失った被爆者のための家を建てたシュモーター氏の深い愛と、絶望の中から生きる勇気と希望を見出し、復興へと歩みだした市民の姿が伝わる展示となりました。

また、八月四日から六日にはシュモーターに学ぶ会による随時解説と紙芝居や絵本の読み聞かせ等も行い、たくさんのお子様連れ等で賑わいました。

(平和記念資料館 学芸課)



シュモーターに学ぶ会による読み聞かせの様子

広島平和学習セミナー (さいたま及び宇都宮) を開催しました

日時 平成29年9月20日・21日
場所 TKP大宮ビジネスセンター
(さいたま会場)
ホテルマイステイズ宇都宮
(宇都宮会場)

参加者 学校関係者、教育委員会、旅行会社

や、平和学習のメニュー、広島への修学旅行の例を紹介しました。

プレゼンテーション「広島での修学旅行」

広島修学旅行のモデルコースの提案や広島でできる体験学習を具体的に紹介しました。

被爆体験記朗読の実演及び被爆体験伝承講話等

体験型平和学習プログラムとして、被爆体験記朗読ボランティアによる被爆体験記や原爆詩の朗読の実演を行いました。

また、今年度初めて、被爆体験伝承者による伝承講話の実演を行いました。被爆者の高齢化に伴い被爆体験の伝承が急務となる中、被爆体験記朗読会や伝承講話への参加者の関心は高く、熱心に耳を傾けていました。

次世代を担う子どもたちに、修学旅行で広島を訪れ、原爆被害の実相と平和の尊さについて学んでもらうため、学校関係者や旅行会社などを対象として、広島での平和学習プログラムについて紹介する広島平和学習セミナーを開催しました。平成二十七年に北関東五県からの広島行の修学旅行専用列車の運行ダイヤが改善されたことを受け、今年度は埼玉県さいたま市及び栃木県宇都宮市でセミナーを行いました。セミナーには、埼玉県内から二十三人、栃木県内からは十九人が出席しました。

プレゼンテーション「広島での平和学習とその効果」

原爆によって壊滅的な被害を受けた広島が復興を遂げる様子を



被爆体験伝承講話実演風景

新国際交流員の紹介 着任あいさつ アンドリューデンプスター



はじめまして、スコットランドから参りましたアンドリューです。イギリスの四か国（イングランド、スコット

参加者の声

参加者からは、「学習素材を明確に知ることができ、伝承講話、朗読を直接聞けたことにより広島への修学旅行がイメージできた」といった意見が多く寄せられました。

(原爆死没者追悼平和祈念館)

「国際平和デー」 記念行事の開催

国連では、毎年九月二十一日を「国際平和デー」と定め、世界の停戦と非暴力の日として、この日一日敵対行為をやめるよう呼び掛けています。

ランド、ウェールズ、北アイランド)の中で二番目に大きいスコットランドは、岩でごつごつとした自然が豊かで、今年、イギリスで有名な旅行ガイドで「世界の中で最も美しい国である」と評価されました。

国際交流・協力課と広島市役所の国際交流課に国際交流員として配属されています。翻訳・英訳チェックをはじめ、学校訪問など、多様な業務を行っています。

(国際交流・協力課)

この趣旨に賛同し、本財団でも記念行事を開催しました。一般参拝者等が見守る中、参加団体の代表者が原爆死没者慰霊碑に献花を行い、正午に参加者全員で一分間の黙とうを捧げるとともに、平和の鐘を鳴らし、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を祈念しました。また、黙とうにあわせて「二〇二〇年までの核兵器廃絶を!」という平和首長会議の横断幕を慰霊碑前に掲げ、その実現を訴えました。今年、七月に核兵器禁止条約が採択され、行事前日には国連で署名式が行われる中での開催となりました。

フェイスブックを通じた二〇〇日前メッセージの発出や、メルマガジンでの呼び掛けにより、国内外の加盟都市においても様々な記念行事が開催されました。

(平和連帯推進課)

「姉妹・友好都市の日」記念イベント 姉妹・友好都市 を市民に紹介

モントリオールの日

七月九日(日)、百貨店の福屋広島駅前店六階マルチの広場で、記念イベントを開催しました。主催ー平成二十九年度モン

トリオールの日実行委員会。
まずはじめに、来場者にメー
プルウォーターと社会福祉法人
広島市社会福祉事業団広島市皆
賀園オリジナルのメープルラス
クを提供しました。

記念セレモニーでは、主催者
等のあいさつ、モントリオール
市長から届いたメッセージの紹
介、来賓としてケベック州政府
在日事務所代表(同事務所広報・
プレス担当官代読)、在名古屋
カナダ領事館領事兼通商代表の
あいさつがありました。

続いて、ヒロシマ・メッセ
ンジャーの大崎宏予さんと倉橋智
子さんが、モントリオール市に
まつわる来場者参加型のクイズ
を行い、正解者に景品をプレゼ
ントしました。

また、カナダ出身の大道芸人・
足長ボンタさんによるバルーン
アートなどの記念パフォーマンス



記念パフォーマンスの様子

スに、会場の子どもたちが大変
喜び、たくさん拍手が起こり
ました。

このほか、メープルシロップ
などの特産品が当たるお楽しみ
抽選会、モントリオールとカナ
ダの紹介展示、モントリオール
市制三百七十五周年記念の展示
や特産品の展示・販売などを
行いました。

約三百三十人の来場者は、食
や芸術文化を楽しみながらモン
トリオールやカナダへの理解を
深めていきました。

ボルゴグラードの日

九月十日(日)、記念イベン
トを開催しました。主催ー平成
二十九年度ボルゴグラードの日
実行委員会。

今年度は、姉妹都市提携
四十五周年を記念し、会場を例
年の広島市留学生会館から紙屋
町シヤレオ中央広場に変更し、
また、ロシア音楽コンサート
は、毎年ご出演いただく田中香
月さんと広島合唱団の皆さんに
加え、ボルゴグラード市で活躍
している青年音楽家三人を招待
し、さらにエリザベト音楽大学
の学生の皆さんにもご出演いた
だくなど、内容を拡充して行い
ました。
受付を済ませた来場者は、ロ

シアのお菓子「パフラヴァ」を
試食しながら、ロシア音楽コン
サート第一部として、エリザベ
ト音大の五人の学生によるピア
ノ、バイオリン、フルートの演
奏とソプラノ独唱を楽しみまし
た。

記念セレモニーでは、実行委
員長、広島市長があいさつし、
ボルゴグラード市長のメッセー
ジをヒロシマ・メッセンジャー
のエカテリナ・シマキナさんが
代読しました。

その後のメッセンジャー企画
では、写真を使ってボルゴグ
ラード市を紹介したほか、ロシ
ア語講座とロシア・ボルゴグ
ラード市に関するクイズを行
い、クイズの正解者には、エカ
テリナさんからロシア雑貨の賞
品が手渡されました。
続いて、田中香月さんと広島



ボルゴグラード市青年音楽家の皆さんによるコンサート

合唱団の皆さんによるロシア音
楽コンサート第二部を行い、さ
まざまなロシアの楽曲を披露し
ていただきました。また、第三
部では、ボルゴグラード市の青
年音楽家三人により、ピアノ、
フルートの演奏とバリトン独唱
による素晴らしいコンサートが
行われ、会場周辺の歩行者まで
足を止め、音楽家の皆さんの演
奏と歌声に聴き入っていました。

当日は、約六〇〇人が来場さ
れ、ボルゴグラード市との姉妹
都市交流を深めました。
(国際交流・協力課)

「日本語ボランティア養成講座(上期)」の開催

様々な国籍の外国人市民が増
加し、定住化が進む中、外国人
市民が地域住民との交流を深
め、地域活動へ参加できるよう
にするための環境づくりが必要
となっています。こうした中、
地域の日本語教室は、外国人市
民の日本語学習支援にとどまら
ず、地域住民との交流の場にも
なっています。

そこで、日本語教室活動の支
援の一環として、地域日本語教
室のボランティアを養成するた

めの講座を、八月十九日から九
月九日にかけて、毎週土曜日に
全五回開催し、二十人が受講し
ました。

第一回目から第四回目まで
は、日本語教師の末田朝子さん
と福永尚子さんをお迎えし、日
本語学習支援の基礎を学びまし
た。王帥さんによる日本語学
習体験談を聴き、日本語教室の
役割や日本語学習の基本を学
び、また、すぐに実践できるポ
イントを押さえたワークシヨッ
プなども行いました。

そして最終回では、ボラン
ティアを募集している日本語教
室の代表者が集まり、教室紹介
を行いました。

希望調査では、受講者全員が
「日本語ボランティア活動をし
たい」と回答し、活動への関心
を高めていきました。
(国際交流・協力課)



教室紹介の様子

JICAサロン「ベリーズってどんな国？」 青年海外協力隊が語る派遣国の魅力」

七月二十三日、国際交流ラウンジを会場に、JICA中国との共催で、平成二十九年第一回JICAサロン「ベリーズってどんな国？」青年海外協力隊が語る派遣国の魅力」を開催しました。

これまでのシニア海外ボランティアに加え、今年度は新たに青年海外協力隊の体験談を聞く会も開催することになりました。その第一回目として、二〇一五年から二年間、中米の国ベリーズで感染症・エイズ対策に取り組まれた山



ベリーズの魅力をわかりやすく紹介していただきました。

田悠加さん^{たゆうか}を講師にお招きし、お話を伺いました。

ベリーズというと、あまり耳にしたことがない国かもしれません。カリブ海に面する四国くらいの大ささの国です。ベリーズの魅力は、その豊かな自然です。数多

生活・文化情報誌 「HIRO CLUB NEWS」英語版

生活・文化情報誌「HIRO CLUB NEWS」英語版には、広島市の広報紙「広報ひろしま 市民と市政」の記事の抜粋や最新のイベント情報など、広島のが分かる情報がたくさん掲載されています。英語版のほか、中国語・ポルトガル語・スペイン語版があり、英語版に掲載の情報の一部を抜粋し翻訳した記事を掲載していま

す。
毎月一回(十二月と一月は合併号)、月初めに発行し、国際会議場一階の国際交流ラウンジなどで配布しています。また国際交流・協力課ホームページにも掲載しています。(http://www.pcf.city.hiroshima.jp/ired/hiroclubnews/)
なお、「市民と市政」の抜粋記事の英語版「City Office Notices」は、毎月中旬にも発行しています。

(国際交流・協力課)

くの貴重な野生動物が生息し、世界第二位の広さのサンゴ礁の保護区もあります。また、マヤ文明の遺跡も多数あり、豊富な観光資源に恵まれています。

山田さんはクイズを交えながら、ベリーズの観光から日常の様子まで、分かりやすくお話しされ、参加者も楽しみながらベリーズについて学ぶことができました。

また、感染症・エイズ対策活動の一環として小学校へ啓発活動に行かれたときの様子を、写真とともに振り返る中で、子どもたちの笑顔が印象的な写真を紹介しながら、山田さんは、子どもたちの笑顔こそが、ベリーズの何より一番の魅力ですと仰っていました。

山田さんのお話を通してベリーズの魅力に触れる機会を持てたのは、大きな収穫でした。参加された方たちは、新しい世界との出会いを楽しんでいる様子で、山田さんのお話を耳を傾けていました。

(国際交流・協力課)

禎子さんの思いを歌う国 モンゴルで語り継がれるヒロシマの物語

独立行政法人国際協力機構 JICA
国際協力推進員 橋本優香

佐々木禎子さんの物語がモンゴルで歌い継がれていることをご存

知ですか？ ある時、モンゴルを訪れた一人の日本人が、折鶴を作りながら禎子さんのお話を語ったそうです。それを聞いたモンゴルの音楽家が曲を作り、今ではモンゴルで知らない人はいない程の歌になっています。一人の小さな女の子に思いを寄せ、平和への願いを歌い継いでくれる…モンゴルとはそんな人々の暮らす国です。

そんなモンゴルで活動した広島の人があります。青年海外協力隊の一員として派遣された大平緑さんは、広島市出身。広島のことを伝えようと、自ら、原爆展を開催しました。禎子さんのお話は歌を通して知っているモンゴルの人たちですが、あの日、きのご雲の下で何が起っていたのか、戦後、被爆者がどんな思いをしながら生きてきたのか、詳しいことを知っている人は、ほとんどいません。核兵器は必要だと考える人も少なからずいます。

大平さんは原爆展の中で、ポスターの展示やDVDの上映を行って客観的に被爆の実相を伝えることに加え、スライド資料を作った戦争を経験した自分のおばあちゃんのおメッセージを伝えたり、テレビ通話を通して被爆者の山本定男さんに証言をしていただくなど、会場と広島、モンゴルの人と広島の人をつなげる工夫をしました。被爆証言のあとは質問が絶えませんでした。

会場にいたある先生は「今日学



山本さんの被爆証言を聞くモンゴルの人たち

んだ事を友達や生徒に伝えていきたいです」と語りました。かつて一人の日本人が伝えた禎子さんの思いが歌い継がれているように、大平さんによって伝えられた、おばあちゃんや山本さんの思いもまた、モンゴルで人から人へと大切に語り継がれていくのかもしれない。

後日、モンゴルで制作された折鶴や寄せ書きが広島に届けられ、平和記念公園内の原爆の子の像に捧げられました。ヒロシマの思いを受け取りましたというモンゴルの人々からのメッセージのように感じました。

青年海外協力隊員による原爆展は、これまで六十七か国で百六十五回以上行われてきました。隊員によって世界各地に伝えられるヒロシマの思いは、現地でさらに人から人へと語り継がれていきます。